

2 月 14 日に、2022 年度から適用される学習指導要領の案が示され、3 月 15 日まで意見募集が行われました。センター試験は 2019 年度 (2020.01 実施) までで、2020 年度実施からは大学入学共通テストとなります。これは、前にも書いたとおり、「新学習指導要領を待ちきれない。現行学習指導要領のもとでも、『主体的・対話的で深い学び』を測る試験は可能である。」ということだと理解しています。そして、これも前に書きましたが、この流れは、2018・19 年度実施の 2019・20 年度入試にも、即ち、48・49 期生の入試にも影響を与えるはずだというのが私の予想です。そして、さらにこれも前に書きましたが、この流れに対する私のスタンスは、「慌てることはない。アクティブ・ラーニングの視点に基づく『主体的・対話的で深い学び』により、課題を発見し解決するために必要な『自ら主体的に学び続ける力』を身につけるだけのこと。」ということです。さあ、勉強しましょう。

### 世に出て力を発揮できる資質・能力を鍛えて、卒業しよう!!!

私が知っている大学の先生は、皆、口を揃えて、次のように言います。「大学に受かるためだけの勉強しかしてこなかった学生は、大学に入ってから資質・能力を伸ばすことなく、大変頼りない状態で社会に出ていくことになる。」と。

そのうちの一人、本校が大変お世話になっている、京都大学教授・溝上慎一先生率いる京都大学高等教育センターと学校法人河合塾が実施しているプロジェクトがあります。2013 年の高校 2 年生 (全国約 400 校、4.5 万人が参加。10 月～12 月実施。) の学習や学校生活、キャリア形成等を通しての資質・能力の成長を、その後 10 年間追跡、つまり現在も追跡中のプロジェクトということです。当時の高校 2 年生 (17 歳)、ストレートに大学進学していれば、今 (2017 年度)、大学 3 年生 (21 歳)。4 月から、いよいよ大学 4 年ということになります。

その彼らが大学 1 年の 11 月～12 月の時点、高 2 の 10 月～12 月から 2 年経過した時点での結果です。彼らの半数の資質・能力は、高校 2 年時に比して、ほとんど変化・成長がなかったそうです。つまり、資質・能力が高かった者は 2 年後も高く、資質・能力が低かった者は 2 年後も低かったということです。

では、2 年前の時点で、資質・能力が高かった生徒にはどのような共通点があったか。それは、次の 3 点です。

- ① 教科外学習に積極的に取り組んでいる。

- ② 豊かな対人関係を築いている。
- ③ キャリア意識を持っている。

教科学習に真摯に取り組み、努力していることは、大前提です。その教科学習と①～③を結びつける視点がアクティブ・ラーニングであり、「主体的・対話的で深い学び」です。教科学習と①～③は、アクティブ・ラーニングの視点によりつながりますが、①～③自体が、相互に関係し合っていることは言うまでもありません。

さて、皆さん。今更ですが、港北高校のあらゆる教育活動（教科&教科外）は、アクティブ・ラーニングの視点で計画されています。「主体的・対話的で深い学び」です。「課題を発見し解決するために必要な『自ら主体的に学び続ける力』」です。港北高校での学び（教科&教科外）を通じて、あらゆる角度から資質・能力を伸ばしてください。資質・能力を伸ばすことなく大学に合格・入学してしまっただけでは、世に出たのちに力を発揮することができなくなってしまいます。

「あらゆる角度」から資質・能力を伸ばしてください。「あらゆる角度」の一部は、「あらゆる教科・科目」です。溝上先生同様、本校がお世話になっている関西大学教育推進部教授・森朋子先生の弁です。「大学で研究をしていると数Ⅲの力が必要になる場面が多く、困っている。」と。文系の生徒に数Ⅲをやれと言いたいわけじゃない。「だから、せめて数Ⅱまではしっかりやりなさい。」ということです。文系・理系を問わず、文章が書けなければ、世に出ても、力を発揮することはできません。文系・理系を問わず、英語ができなければ、世に出ても、力を発揮することはできません。スポーツ選手がいい例です。海外で活躍している選手は例外なく、英語その他の言語を使いこなしています。2015年のラグビーワールドカップで大活躍し、サモア戦、アメリカ戦ではマン・オブ・ザ・マッチ（その試合のMVP）に輝き、大会ベストフィフティーンにも選ばれた五郎丸歩選手。彼は、その後、オーストラリア、フランスへと渡りますが、彼には残念ながら彼のラグビー力を発揮するための語学力が不足していました。2012年のノーベル生理学・医学賞、iPS細胞の山中伸弥教授。彼の英語は流暢ではない。しかし、彼は英語を十分に使いこなし、彼の英語は十分に通じている。英語力とは何なのかということについて、山中英語は示唆に富んでいます。その山中教授は、「研究は半分。残り半分は『どう伝えるか』。」と言っています。アクティブな英語力とアクティブな表現力が、山中教授の研究を支えています。

あらゆる港北高校の学び（教科&教科外）があなたの能力・資質を鍛えます。好成绩は、受験科目だけでも結構です。しかし、取り組まない科目があってはいいけません。すべての教科・科目に取り組まなければ、あなたの資質・能力は伸びていきません。あらゆる港北高校の学び（教科&教科外）を通じて、「世に出て力を発揮できる」資質・能力（自学力）を鍛え、本校を卒業し、次のステップに進んでください。さあ、勉強しよう。